巻頭言

善明宣夫先生のお働きに感謝して

学長　村　田　　治

1924年の中等学校教員無試験検定資格の認可に始まる関西学院大学の教職課程の歴史は、まもなく一世紀を迎えます。建学の精神たるキリスト教主義を胸に刻んだおよそ三千人の同窓教員が現在学校現場で活躍していますが、その多くにとって、善明宣夫教授は心の拠り所となっています。

善明教授は1978年に関西学院大学文学部教育学科をご卒業後、同年４月に関西学院大学大学院文学研究科博士課程前期課程教育学専修に入学、1980年３月に同課程修了、同年４月より同研究科博士課程後期課程に進学し、1983年３月に同課程を単位取得満期退学されました。大学院在籍中の1979年４月から1981年３月まで関西学院大学文学部教学補佐、続いて1981年４月からは関西学院大学教職課程指導員、1985年４月からは関西学院大学非常勤講師を務められました。1990年４月に大阪商業大学商経学部に任用され、本学を一時離れられますが、本学教職教育研究センターの発足に伴い、1999年４月に本センター助教授としてお戻りいただきました。2003年４月より同センター教授および本学文学研究科博士課程前期課程指導教授に任用され、現在に至ります。学内の要職としては、教職教育研究センター副長（2005年４月から2009年３月まで）、本学総合教育研究室副室長（2008年４月から2009年３月まで）、教職教育研究センター長（2009年４月から2013年３月まで）、本学学校関係者評価委員などをお務めいただきました。およそ30年の長きにわたって教職を志す学生を指導され、また教職教育研究センターを要とした本学教職課程の体制を整えてこられたことは感謝の念に堪えません。

善明教授のご研究は教育心理学に分類されるものですが、後述するドグマティズム研究、不登校、いじめ、過剰適応や虐待といった教育課題の研究、教職を志望する学生や現役教員の意識に着目した研究など、さまざまな対象を扱われています。そこに一貫するのは、「教育に関わる人々のために、心理学者として伝えられることは何か」という問題意識でした。問題の中で悩み不安を抱く人に寄り添う姿勢こそ、善明教授の研究を支えるものであり、幾多の類似の研究と一線を画しています。編著『改訂版 学校教育心理学』（福村出版、2013年）をはじめ、研究業績の数は約50件に及びますが、その成果は「発達・学習過程論」「教育相談基礎論」などの教職科目、現役教員を主な対象とする教員免許状更新講習や兵庫県中堅教諭等資質向上研修、そして兵庫県教育委員会の委嘱による複数の学校でのスクールカウンセラーなどでも発揮されていました。

こうした善明教授の姿勢は、ライフワークといえるドグマティズム研究に基づくものといえるでしょう。ドグマティズムは権威主義的パーソナリティ研究の系譜に位置づけられるパーソナリティ理論であり、他者への不寛容さや頑なな態度を明らかにする観点を提示するものです。善明教授は10本を超える単著論文を通して、ドグマティズムの理論的・実証的研究の意義と展望を提示されました。差別や偏見に囚われることなく、他者と共生することを理念として追求された一連のご研究は、日本が迎えつつあるグローバル社会において一層その重みを増していくことでしょう。

そして特筆すべきは、善明教授がその理念を自らに課し、学生に伝え、教育現場に広めたことです。教授は1981年から10年に及んだ教職課程指導員の時代から、この理念を以て学生指導を続けられました。指導員時代の学生は今では学校現場や教育委員会でリーダーを務めています。硬さに囚われることのない学校、教師、子どもたち――多様な人々が互いを尊重しながら伸びやかに生きることを、自らの生を通して伝えられてきた善明教授の教えは、混迷する現代の学校における灯となり、その光は今も広がりつつあります。

現在、関西学院大学は幼・保・小・中・高の教育者・保育者の養成を行っていますが、学校教育をめぐる今の状況は混迷の度を増しています。グローバル化、少子化、子どもの貧困といった社会的問題への対応、また学力観の再定義や教員の質的向上など、教員養成にも多くの課題があります。一層のご指導をいただきたい時、先生のご退職が大変残念でなりません。「“Mastery for Service”を体現する世界市民の育成」という本学の教育の使命にご貢献いただきました善明宣夫先生に深く感謝申し上げたいと思います。